

メルボルの魅力

メルボルン日本人学校 今井克彦



オーストラリアの南東部にあるビクトリア州の州都「メルボルン」。その名前は18世紀のゴールドラッシュ時のイギリスの首相メルボルン卿にちなんでつけられたそうです。メルボルン中心部には、碁盤の目にしたがって1800年代に作られた歴史的建造物と近代的な高層ビルの両方が建ち並んでいます。ヨーロッパ調の大聖堂の数々、世界遺産の王立博覧会ビル、100年以上市民に親しまれるビクトリアマーケット、ガラス張りの近代的でユニークな形をした美術館、そして緑あふれる広大な公園の間を「トラム」とよばれる路面電車が縦横無尽に走っています(写真①)。ここでは冷暖房完備でノンステップの新しい車両が走る反面、冷房も暖房もない内部が木製仕様の車両も走っています。このような風景を見ると、メルボルンに住む人々の古きものを大事にしながら新しいものも受け入れていく気質を感じることができます。写真①にあるように1854年にロンドンのセントポール寺院の円形屋根を模して建てられたフリンダース駅と、南半球最高層の展望室を持つビルとが共存している風景は、まさにメルボルの雰囲気そのものを表しているといえるでしょう。移民を受け入れることでも積極的なメルボルンは、周辺にヨーロッパやアジアからの移民街が形成され

ました。そこではそれぞれの国々の雰囲気を感じることができ、フランス料理、中華料理、マレーシア料理、ベトナム料理など、各国の食文化を華やかに楽しむことができます。もちろん日本料理もその例外ではありません。昼食に生のサーモンとアボカドの入った恵方巻きのような「sushi」をほおばるオージーの姿をよく見かけます。日本食のレストランやラーメン店の出店も目立ち、行列ができる店もあります。このように、メルボルンに生きる人々の、お互いを認め尊重し合う雰囲気はイギリスの紳士淑女の考え方の影響が大きいかもしれません。治安もよく、街ゆく人も優しく笑顔で声を掛け合い、ボランティア活動に熱心な人々とも多く接することができます。



写真① メルボルン市街

「メルボルンは一日の中に四季がある」といわれるとおり、朝から快晴でも突然降雨となることがあります。そしてしばらくすると雨は上がり、太陽が顔を出したかと思うと、大空には美しい虹が曲線を描きます。中心部以外は高層ビルがありませんので、上空に鮮やかな虹を見ることができます。赴任当初、大きな半円を描く虹を間近に見たときの感動は忘れられません。また、ここでは「クールチェンジ」といって南極方向からの風の影響で気温が一気に下がることがあります。昼間は強い陽ざしで気温が30℃以上に上がっても、夕方には肌寒くなることもしばしばです。ちなみに2014年を迎えた元日の気温は最高20℃以下でした。しかし、3学期が始まった1月中旬には一気に気温が上昇し、最高気温43℃を記録しました。メルボルンは「ガーデンシティー」とよばれるだけ

あって、緑が多く広々とした公園をいたるところに見ることができます。少し車を走らせると美しいビーチや緑豊かな山々が広がり、海岸ではリトルペンギン、近くの山ではカンガルーやワラビーを見ることができます。メルボルンの住宅地ではポッサムが顔を出すことも多いです。まさに豊かな自然の中で、共栄共存しようとするオージーたちは、動物を大切に、環境保護にも気を配っています。景観を大切にするため、こまめに草を刈り、数多くある国立公園への立ち入りには規制があり、とくにゴミの扱いには厳しい罰則が科せられており、オーストラリア大陸の自然を守ろうとする人々の意識の高さの現れだと感じます。

さて、メルボルン中心部から南東におよそ10キロ離れたグレンアイラ市の閑静な住宅地の中にメルボルン日本人学校があります。全校児童生徒は70名ほど（2014年9月現在）で、来年度30周年を迎えます。「進んで学ぶ子 思いやりのある子 強い意志でやりぬく子」を目標に、子どもたちは毎日元気に学校生活を送っています。本校の特色のひとつに、現地の学校との交流学习があげられます。学年ごとに相互訪問をし、お互いの文化を紹介したり、授業と一緒に参加したりします。交流するにはコミュニケーションが必要です。本校中学部では週7.5時間英語の授業を確保し、英語力の向上にも力を入れています。現地の理解教育にも力を入れています。小学部は消防署、スーパー、自動車工場、州議事堂見学などに出かけ、現地で働く人々に英語で質問をするなどして多くのことを学んでいます。中学部では今年度から進路学習の一環として、海外で活躍する方々から働くことの意義、人としての生き方を学ぶべく日系企業への職場訪問学習を予定しています。また、メルボルン日本人会が主催する「ジャパフェスティバル」や「メルボルン夏祭り」にも積極的に参加し、日本文化を現地の人々に紹介する活動も行っています。今年度は数年ぶりに国際色豊かな「国際子どもフェスティバル」という行事にも参加しました。2014年のホスト国はトルコでしたが、シンガポール、インドネシア、中国、マレーシア、韓国などのアジア諸国の子どもたちが、自分の国

の民族衣装をまとめて踊りを披露するという、まさに多民族が集うメルボルンを象徴するイベントでした。メルボルン日本人学校の児童生徒も小学部は山形県の「花笠音頭」、中学部は北海道の「南中ソーラン」を披露し、イベントの最後を飾りました（写真②）。英語圏の国でありながら、さまざまな国の多様な文化に触れることができました。まさに多文化国家を象徴する祭りであり、このような体験ができることもメルボルンのよさではないかと思います。



写真② 国際子どもフェスティバル

金融や情報産業を中心とするシドニー、政治の中心であるキャンベラに比べ、ビジネス面では主に自動車などの製造業、また鉱業に携わる企業が多いといわれるメルボルン。日本とのつながりも深く、メルボルン日本商工会議所は半世紀近い歴史があります。2014年に入り日系の大手自動車メーカーの工場が2017年に撤退することが発表されました。地元メディアもトップニュースで繰り返し報じ、その影響の大きさを実感しました。最近では衣料品を販売するファッション関連企業が豪州1号店をオープンさせ、また生活雑貨を販売する企業の出店や、低料金で運航する航空会社が日本からの直行便を数年ぶりに就航させるなど、新たな動きも見られます。メルボルンは、2014年もイギリスの雑誌「エコノミスト」が発表する「世界で最も住みやすい都市」ランキングで4年連続の1位だそうです。日本との関わりも今後、さらに深くなっていくように思います。他民族同士の関わりを大事にした魅力ある街作り、自然を大切にしようとする雰囲気などが、世界の人々を惹きつける理由かもしれません。